

提 言

ひとりひとりが“私”として輝いてこそ 地域文化と暮らしの価値は豊かになる



辰己佳寿子

福岡大学 経済学部 教授

たつみ・かずこ／1970年広島県生まれ。専門は農村社会学、地域社会学。博士(学術)。2003年より山口大学に所属し農の真髄に触れる。2013年4月より現職。アジア農山漁村でのフィールドワークを通して多様で豊かな生き方が実現する地域社会のあり方を模索している。編著『戦後日本の開発経験』(明石書店)に収録の「協同農業普及事業導入時における“適応・再編成”」「外部介入型の農村開発から内発的な農村発展への転換過程」を執筆。NPO広島神楽芸術研究所理事、第65回全国家の光大会審査委員。

農村をフィールドに地域文化や暮らしを研究してきた辰己さんは、ともすれば慣習的と思われてきた農村のさまざまな組織に、所属する個人の変化が訪れていると指摘する。組織の内外でひとりひとりが個性を発揮することによって、多様性のある農村の魅力と価値が力強く生み出されているという。

■ 神楽は“私”を表現する 機会となってきた

ドン、ドン、ドドン。収穫の秋になると神楽の笛や手打鉦(ちょうちがね)や太鼓の心地よい音が聞こえてくることがある。里神楽(以降「神楽」という)は神座(かみくら)を設けて神様を勧請して祭る地域社会の生命・健康・豊穰等の加護を祈願する地域の文化である。観光用に



神楽を舞うことは自己表現でもある。魅力ある伝統文化が若者たちに受け継がれている。写真は広島県北広島町の筏津神楽団が演じる『天の岩戸』(写真提供/NPO広島神楽芸術研究所・湧田裕樹)



郷土の画家・阿川静明氏の作品
「昭和30年頃の氏神神社の神楽風景」(提供/石井誠治)

ショーアップされた神楽もあるが、基本的には地元の神社で地域の人々が舞うのが地元の神楽である。だから、神楽面を着けて舞っていても地元の観者はその舞手が誰かはわかっている。舞手は仮面を着けることによって日常の私ではない非日常の“私”を演じる。そして観者たちはハレの舞台上で輝く舞手に拍手喝采を浴びせる。年長者にとって神楽は生きがいであり、若者にとって神楽は“私”を表現する機会となってきた。神楽舞をする

ために農村での暮らしを選択する若者も出てきた。伝統的な地域の文化においても個性が問われる時代になった。

■ ひとりの人間としてどうあるか～“私”が問われた瞬間～

学生時代の私は神楽に魅了され農村に通い続けていた。その延長線上で農村研究に行き着いたのである。駆け出しの頃、ある農村での交流会で自己紹介をする機会があった。「ほうれん草を作っている〇〇です。役場勤めもしています」「白菜の□□です。青年協議会にも属しています」「スイカの◇◇です。目指すは師匠の☆☆さんです」「地元大豆で豆腐を作っている◎◎です。女性グループのリーダーもやっています」と、地域に根ざして暮らしている方々は専門性と多面的な役割を通して自己を表現された。この時、私は「△△大学の辰己です」と所属組織を名乗るといった表面的な自己紹介をしてしまった。「ひとりの人間としてどうあるか」を問われたのに、当時の私は“私”に自信がなかったために組織の形式的な仮面でごまかしたのであった。この瞬間の恥ずかしい思いと“私”で勝負している方々の背景を知りたい気持ちが農村研究へ踏み出す契機となり、今の“私”がある。

■ 暮らしのなかで“私”として勝負している女性たち

あれから20年以上が経ち、2024年2月に横浜で開催された第65回全国家の光大会に出席した。会場の熱い息吹を感じた私は、今こそ「ひとりの人間としてどうあるか」という存在価値が地域文化と暮らしを豊かにするという確信をもった。発表者は県代表として組織的な期待も受けながら舞台に立つが、彼女たちは組織的な仮面ではなく“私”として勝負していたからである。限られた時間で発表された内容は『家の光』記事活用を切り口にした一面にすぎないが、その背景には家族、仲間、グループ、J A、地域等の関係のなかで織りなされる豊かな暮らしがある。組織運営や地域社会の問題、環境問題、コロナ禍や災害など、直面する課題は多様で流動的であるが、その都度、悩み抜いて考えて仲間とつながり

行動を起こして乗り越えてきた。画一的でマニュアルどおりの対応ではなく、柔軟にしなやかに対応する能力は農や食を通して自然と向き合ってきた経験から培われてきたものと思われる。地に足を着けて屹立(きつりつ)してきた自信があるからこそ、ハレの舞台上で最高の“私”が登場するのだ。



全国家の光大会では、女性たちが地域の仲間と生き生きと活動する様子が発表された

■ 組織人と“私”のほどよい距離感

『家の光』を記事活用する女性たちは、組織人と“私”のほどよい距離感をうまく保っている。昨今、組織の悪しき慣習に無意識に従っていたり、責任の所在が不明確であったりと、組織的な弊害が浮き彫りになりつつある。昭和という時代は組織を優先することが美德とされていたかもしれない。しかし、令和時代はひとりひとりの柔軟で多面的な個性が鍵となる。大事なものは、組織に属する機能としてのヒトではなく、組織を織りなすひとり人間である。組織を疎かにしろといっているのではない。役職に就くことで行動力や責任感が増すこともある。組織の経験がその人の個性となって組織外でも役に立つこともある。組織で役割を十分に果たし成長しながら“私”であることを大事にしていきたい。

組織といっても、お金を基準とした費用対効果重視の会社と組合は異なる。ひとりひとりが主役になれるのが組合の特徴である。特にJAはその名のおり農業という自然に対峙する方々の集まりであるから柔軟性を自ずと持ち合わせているはずだ。組織が傾斜しがちな形式主義や画一化に陥らないよう、JAの意識改革のひとつとして、今一度、“私”との対話を通して、組織人と“私”のほどよい距離感を見つめ直してはどうだろうか。JA組織の関係者は、組織人であると同時に、ひとりの農業者であったり、地域の一員であったり、そして消費者でもある。家族・仲間・地域・組織等に対してさまざまな顔をもって暮らしている。どの顔も“私”であり、柔軟で多面的だからこそ人間らしいのである。どの組織に属していてもどんな地位についていても「ひとりの人間としてどうあるか」という存在価値を見失ってはならない。ひとりひとりが“私”として輝きながら柔和で動的なかわりをもっていくこと、これこそが組織文化はもとより地域文化や暮らしの価値を豊かにしていくのである。